

中谷徳太郎研究

——「シバキ」を中心に——

はじめに

中谷徳太郎（一八八六—一九二〇）は一九一〇（明治四十三）年から一九一九（大正八）年の間に、主に小説と隨筆を、他に評論、戯曲、小唄などを書いた作家である。現在ではほとんど名を聞かない作家であり、数冊の文学事典に名があるのみでほとんど無名と言つてよい。そんな無名の作家をどうして研究するに至つたのか。

中谷の名を初めて知つたのは二〇〇九年度後期の授業で「スバル」という雑誌を扱つた時であつた。「スバル」に掲載された戯曲作品を中心に調査しており、「スバル」第四年第一号（一九一二（明治四十四）年一月）に掲載された『北の林』という戯曲を読んで興味を持つた。いくつかの戯曲作品を読んだ中でも、中谷の『北の林』は全体的に文章が読み易く、話の世界に引き込まれた。登場人物たちの会話が軽妙で、言葉のやりとりが自然で無理がなく、言葉遣いも比較的新しいため軽快に読み進めることができた。また、読後の印象が、テーマが不明瞭で、何を言いたいのがよくわからない作品だつ

谷田 辺 智 子

たということも、この作品を忘れられなかつた一つの原因である。

「スバル」第四年第一号（一九一二（明治四十五）年一月）には、久保田万太郎『暮れがた』、長谷川時雨『大葉子』、長谷川虎太郎『金五郎』、水上瀧太郎『評議員会』が並んでいる。

中谷だけはあまり知られていない作家であるが、実力者たちと共に戯曲が掲載されるならば、彼もまた実力のあつた作家であつたのだらうと考へた。調査を始めると、資料の少なさに驚いた。近辺にある事典で中谷徳太郎の名を見つけることが出来たのは一冊しかなかつた。先行研究もほとんどなく、予想以上に知られていない作家だと言ふことがわかつてきた。それでも同時代評は五〇以上あることから、中谷が執筆していた当時はそれなりに名が通つた作家であつたと言える。また、中谷の周囲には、楠山正雄、島村民蔵、長谷川時雨といった現代まで名が残り、偉業を伝えられている人物が大勢いる。そんな中、なぜ彼だけは過去の活躍を伝えられていないのだらうか。

第一章では、中谷徳太郎の生涯を展望する作品リスト、年譜を作成し彼の生涯を概観していく。第二章では、演劇雑誌「シバキ」を中心に考察していく。大正二年に中谷が自ら編集にあたって「シバキ」という演劇雑誌を発刊した。「シバキ」発刊前後には演劇に関する論文を多く書くが、その廃刊後にはほとんど評論の執筆は見られなくなる。このような特徴に注目して、中谷徳太郎の演劇に対する姿勢を掘り下げていく。本論文では、演劇活動と評論という新たな視点から中谷徳太郎の評価を試みたい。

第一章 中谷徳太郎とはどのような人物だったか

第一節 年譜

中谷徳太郎という人物について初めて詳細を知ったのは、『日本近代文学大事典 第二巻』（日本近代文学館、小田切進編、一九七七年・一八）に記載していた記事からである。この文章が研究を進める上で重要な資料となった。

この記事によると、文壇に広く認められていなかったが佳作は多いらしいことがわかる。生前に単行本を出版していないことも、評価されにくい一因であるが、幸い遺稿集が友人らによって編まれていた。この年譜では中谷徳太郎の作品を確認できたものを全てを載せた。作成の基になったのは『孔雀夫人』に収められていた著作年譜（以下、孔雀年譜）である。その著作年譜を加筆修正していった。

主に創作作品のみの『孔雀夫人』の著作年譜に、新たに確認された作品を追加した。中谷の生活上の事項については、先行研究や中谷

の随筆などから検証し、辻褄が合うものを載せていった。作品タイトル前の★は『孔雀夫人』所載、☆は『三人の女』所載の作品を表す。▼は文壇事項、歴史上の出来事を表す。

一八八六（明治十九）年

七月七日 東京深川木場に材木屋の息子として生まれる。十代後半を父親が番頭を勤める材木屋で丁稚として過ごす。

一九〇三（明治三十六）年…………… 十七歳

この頃から長谷川時雨と文通を通して交流が深まる。新聞雑誌にはじめて文章が載る。丁稚時代から文学に志し、早稲田大学入学を果たすまでの様子を小説『若き日の夢』（大七・四）に描いている。

一九〇四（明治三十七）年…………… 十八歳

秋にはじめて坪内逍遙の宅を訪れ、試作を見せる。早稲田大学英文科の聴講生となり、逍遙の指導を受ける。

▼二月八日 日露戦争開戦

一九〇五年（明治三十八）年…………… 二十歳

三月にはじめて長谷川時雨と会い、交際が始まる。愛相橋隣の佃島の家（現在中央区佃島二丁目）へよく遊びに行き、時雨と恋愛論、演劇論を戦わせた。一

▼九月五日 日比谷で講和反対の国民大会が開かれ、交番などの焼き打ち

が起こる(日比谷焼打ち事件)翌年「早稲田文学」が島村抱月によって復刊される。一九〇七年八月 長谷川時雨と水橋信藏との協議離婚が成立する。

一九〇九(明治四十二年)年……………二十三歳
早稲田大学英文科を卒業。

一九一〇(明治四十三年)年……………二十四歳

この頃、時雨と共にしばしば箱根の宿に逗留していた。

五月『豹と脣』(小説、「世界文藝」) 七月『太陽跪拜者』(戯曲、「早稲田文学」) 十月『蟻』(戯曲、「劇と詩」) 十一月『正雄さん』(小唄、「劇と詩」) 十二月『ダン・フアンの失敗』(ペアリング作、翻訳戯曲、「劇と詩」)、『新道』(小唄、「劇と詩」)、『新時代劇のシヨオ』(Shavian Philosophy) (評論、「劇と詩」) 五)

▼五月十九日 ハレー彗星が地球に最接近。日本でも流言、噂、不安を呼ぶ。七月発表の「太陽跪拜者」では、五月のハレー彗星最接近の混乱を作品中に描く。

一九一一(明治四十四年)年……………二十五歳

三月★『うらみごと』(小唄、「劇と詩」) 六月『落ちる椿の花 浅草の活動写真にあるやうな帝国劇場の日本人むき人情劇』(評論、「讀賣新聞」十八日)、『歌舞伎座の新味 懐中鏡で悪戯する菊五郎』(評論、「讀賣新聞」十九日) 七月『俗謡樂

の新情味』(新彩) 八月『東京夜景』(隨筆、「新日本」) 十月『十年の後(一)』(戯曲、「早稲田文学」)

一九一二(明治四十五・大正元年)年……………二十六歳

一月 楠山正雄を編集発行人主任として「シバキ」(第一年)を創刊する。一月号の表紙には「とくたるう」の署名で詩が掲げられている。「シバキ」は七月で休刊する。

一月『蜜柑の皮』(戯曲、「シバキ」)、『北の林』(戯曲、「スバル」) 二月『劇場印象記』(隨筆、「シバキ」)、『紙芝居』(評論、「シバキ」) 三月『新しき舞踊』(評論、「シバキ」) 四月『小さき劇場』(評論、「讀賣新聞」二十四、二十五日) 五月『墮地獄』(戯曲、「シバキ」)、『Magda』(Huneker 作、翻訳評論、「シバキ」) 六月『タンタイルの死』と『道成寺』、『故郷』(評論、「シバキ」)、『劇評家の脚本』(The odor Herz 作、翻訳小説、「シバキ」)、『舞臺上の新味(一)「キスメット」』(エドワード・ノオプロウチ作、紹介、「シバキ」) 七月『スコットランドのレバアトリー劇場』(評論、「シバキ」)、『近代劇の舞台(四)(五)(六)(三)』(紹介、「シバキ」) 十月『笑はざる人より』(評論、「讀賣新聞」二、二日) 十二月『二十世紀を見る』(評論、「演藝畫報」)、『サロメ』を見てから』(評論、「歌舞伎」)、『テリイの講演旅行 女優エレン テリイがアメリカを巡回講演当時随行せる者の記録』(作者不明、翻訳隨筆、十四、十五、十七、十九、二十一日「時事新報」)

▼四月 時雨が舞踊研究会を創立する。

一九一三(大正二)年……………二十七歳

二月 中谷を編集主任として「シバキ」(第二次)を創刊する。四月六日 濱町の岡田で木場の連中の宴会があり参加する。そこで野呂間人形を見る。五月「シバキ」四号では、時雨作『空華』三を上演するための後援会を組織する。この頃、時雨との喧嘩が絶えなかつた。七月で「シバキ」は廃刊。十一月 長谷川時雨作、市村座狂言『丁字みだれ』を見る。

一月『(大正元年の追懐)「浮名異」と「柘右衛門」』(評論、「歌舞伎」)、『第一の對話』(評論、「シバキ」)、『十人の踊り子』(評論、「大正演藝」) 三月『櫻畑』二五(チエーホフ作、翻訳戯曲、「シバキ」)四、五、七月まで連載)※「シバキ」三月号の後書きに「木場町生」の署名で『櫻畑』のラアナウスキイ夫人の写真について中谷のコメントあり。 四月『橋の名残』(戯曲、「早稲田文学」)、『劇壇の新運動(ウイスクンシン)』(演劇事業)『(評論、九)十日「時事新報」』、『脚本翻訳』(評論、「讀賣新聞」十)十一日) 五月『サウオイ座の沙翁劇』二六(「シバキ」)、『廢都の印象』(隨筆、「讀賣新聞」十三)十四日)、『(何所へ行く?) ばたりとぶつ倒れに行く』(アンケート、「新潮」) 六月『野呂間人形を見る』(評論、「演藝畫報」) 七月『墮落』(戯曲、「讀賣新聞」十三日) 八月『山嶽印象記』(隨筆、「婦人評論」) 九月『雨降る日』(小唄、「享樂」)、『モンテネグロの旅』(「エル・ロチ作、翻訳隨筆、「新日本」) 十月『女優の思出』(エレン・テリイ作、翻訳隨筆、「婦人評論」)、『応報』(戯曲、「讀賣新聞」五日) 十二月、『丁字みだれ』(評論、

「演藝畫報」)、『大正二年、芸術界の收穫』(アンケート、二十三日「時事新報」)

▼四月 「シバキ」同人の秋田雨雀が、沢田正次郎らと美術劇場を立ち上げる。十二月 時雨は六代目菊五郎と共に狂言座を立ち上げる。

一九一四(大正三)年……………二十八歳

二月二十六)二十八日 狂言座(七)第一回公演(帝劇)が行われ、中谷作『夜明前』坪内逍遙作『新曲浦島』、河竹黙阿弥作『夜討會我狩場曙』を森鷗外が改作した『會我兄弟』を上演した。八月半はより書斎の増築工事が始まる。八月末より病気になる。二月ほど寝込む。一八時雨との仲が微妙に変化してくる。九月発表の『抜け裏』にも描かれるように、春頃には時雨の妹の春子に恋をしたこともあった。一〇月 書斎が完成する。この書斎がお気に入り、頻繁に隨筆に登場する。

一月『上著(グレゴイイ)』(秀才文壇)、★『還りゆく國』(戯曲、「早稲田文学」) 四月『(明治の東京) 思ひ出すまゝに』(新小説)、『印象と記憶』(隨筆、「讀賣新聞」十二日)、『夜明前』のでまかせ』(隨筆、「歌舞伎」) 七月『夏』(小説、「秀才文壇」)、『(曾遊の涼味) 山も川も森も』(隨筆、「讀賣新聞」四日) 八月『世界的戦争と汎日本主義』(評論、「讀賣新聞」二〇)二十一日) 九月『抜け裏』(小説、「早稲田文学」)、『現下の演劇壇その将来は如何』(隨筆、「讀賣新聞」二十六日) 十一月『水郷日記』(隨筆、「新評論」)十二月、『火薬の匂ひ』(隨筆、「讀賣新聞」五、八日)

▼四月 美術劇場第一回公演を有楽座で行う。六月 舞踊研究会の第七回例会(最終回)が紅葉館で催される。十一月二十一〜二十三日 市村座で狂言座第二回公演が行われる。

一九一五(大正四)年……………二十九歳

春ころから、中谷は時雨と疎遠になる。時雨との件でゴシップが新聞沙汰になり中谷の名前が有名になる。一九この頃から俳諧に積極的に取り組む。七月末〜八月初めに時雨と別離する。八月に富士山に登り箱根に滞在する。二〇その滞在中(八月の末)に書かれた『霧立つ山にて』では、時雨との別離の様子、その当時の気持ちなどが記されている。

一月『ねがひ』(小説、「新評論」)、『發途』(小説、「秀才文壇」)、『駭長』(小説、「讀賣新聞」十日) 三月『かけら』(小説、「早稲田文学」) 四月『独身会の追憶』(隨筆、「讀賣新聞」二十五日) 六月★『孔雀夫人』三(小説、「文章世界」)★『水郷日記』(隨筆、「讀賣新聞」十三日) 八月『貞操』(小説、「太陽」★)、『晝寐の夢に』(「文章世界」) 九月『霧立つ山にて』(隨筆、「讀賣新聞」五、十一、十九日) 十二月『不良少女と藝術』(評論、「處女」)

▼八月 三上於菟吉が時雨に自著を送る。

一九一六(大正五)年……………三〇歳

このころ武林無想庵と知り合い、禅に親しんでいく。宮川曼魚との

交流が深まる。

一月『黄昏のころ』三(小説、「早稲田文学」)、『謀叛人』(小説、「秀才文壇」)、『ジャアマン ピイフ』(モーツパサン作、翻訳戯曲、「演劇」)、『燃えきるまで』(小説、「讀賣新聞」三〇日) 二月『眼』(小説、「新日本」) 四月★『なげぶし』(小唄、「邦樂」)、『謀叛人(續篇)』(小説、「秀才文壇」)、『春のたはむれ』(対話、「處女」)、『雁名残』(隨筆、「讀賣新聞」二日) 六月『水のとおり』(隨筆、「讀賣新聞」十一日) 八月『椿の岡へ』三(小説、「文章世界」)★『プラタンの風』(短歌、「もんじやき」) 十一月★『男化粧』二(小説、「早稲田文学」)、『余が好める秋の描写』諸家より得たる回答 投函三つ(アンケート)、『文章倶楽部』 十二月『坐敷牢』(隨筆、「讀賣新聞」二十四日)

▼坪内士行が早稲田派の作家白石実三に宛てた書簡(一九一六年十二月二十七日付)の中で、「あの男も時雨女史が今後あいてにせずにあてればかへつて真実味のある物を書きやうになるだらうと思ひます」とある。二五

一九一七(大正六)年……………三十一歳

一月五日 初めて岡野知十と会う。これ以後交流が深まる。夏ころ雑誌「鐘」主催の談笑会にて陶山務と知り合う。二六 七月に返子に滞在する。九月三〇日 大型の台風が東京を直撃して深川は全河川が氾濫し、各河川沿いは床上浸水した。中谷の書齋も被害に遭う。この頃から酒の量が増したと実弟が記している。十二月 生方敏郎の新著出版記念化に参加する。二七 九日 市村燕子の家で催された

句会に参加する。この時のことを「根岸の一夜」に記す。

- 一月☆『三人の女に』（懸想文、「もんじやき」）三月『打つ勿れ』（小説、「太陽」）四月★『物語の時代』三八（小説、「早稲田文学」）、☆『アンチセシス』（小説、「もんじやき」）、『梨花の雨』（隨筆、「讀賣新聞」二十二日）五月『浮世繪』（小説、「東方時論」）、『鏡花氏の新作「幻の繪馬影」合評』神秘めいた色』（評論、「中央文学」）、★『文字鹿の子』（小唄、「畫堂」）六月『水に堰かれて』（詩、「趣味の友」）、☆『水郷夜曲』（音響詩、「もんじやき」）七月『過ぎ行く幻影』（小説、「文章世界」）、『汐垂髪』（小説、「斯論」）、☆『薄暮情調』（訳詩、「もんじやき」）、『私の愛唱する夏の歌』（紹介、「文章俱樂部」第二年第七号）八月『邪魔する雲』（小説、「東方時論」）、☆『拳固がしやべる』（詩、「もんじやき」）九月『夢香の昇天』（小説、「斯論」）、『夜の秋』（小品、「青年文壇」）、『未来派の服飾』（紹介、「趣味の友」）、『稻妻』（小説、「読売新聞」二十五〜二十七、二十九日、十月九〜十三、十六日）十月『袴か長襦袢か』（隨筆、「趣味の友」）、『趣味の學校』（隨筆、「斯論」）十一月『雨がふる』（小説、「新日本」）、『長き夜』（小説、「斯論」）、『水窓雑記』（隨筆、「讀賣新聞」二十八、三〇日）

一九一八（大正七）年……………三十二歳

三月末に鎌倉逗子方面で遊ぶ。四月二十五日の「讀賣新聞」では『近く鎌倉に赴き參禅生活に入る心組なりと』と消息を報告されている。新秋に山本露葉、藤井伯民、高須梅溪と州崎の御茶屋で夜を徹して痛飲する。その後高須とともに御茶屋へ出かけて朝酒に浸る。

二九 十一月末に河野桐谷氏らと箱根に遊ぶ。十二月 小田原に病人を見舞い、ふと思い立つて箱根に行き、湯本から塔之沢まで夜道を歩き、昔馴染みの宿に滞在する。三〇

- 一月『藻に住む蟲』（小説、「新時代」）、『土堤の腰掛』（小説、「斯論」）、『殴られる女』（小説、「趣味の友」）二月☆『根岸の一夜』（小説、「新日本」）、『熊が舐めた』（小説、「中央文壇」）、『春を待ちつつ』（隨筆、「秀才文壇」）、★『七草粥』（小唄、「新曲」）三月『野狐の屍』（小説、「讀賣新聞」十七日）四月★『若き日の夢』（小説、「新時代」）、『夜明前』（戯曲、「秀才文壇」）五月『蕁麻の花』（小説、「新公論」）、『をぢさんの幻影』（小説、「斯論」）、★『花から雨に』（隨筆、「讀賣新聞」二十六日）六月☆『リズム模様』（小唄、「新曲」）、『盞を伏せて』（隨筆、「趣味の友」）七月『焦熱地獄へ』（小説、「太陽」）八月『月夜』（小説、「中外」）、『夏の旅行地の感想』松本平と日本アルプス』（アンケート、「新潮」）九月『甘酒つくる宿』（小説、「雄辯」）、『思ひ出の月』町中の月』（隨筆、「大觀」）十一月☆『栃落葉』（隨筆、「新曲」）十二月『二つの挿話』（小説、「秀才文壇」）、『初冬の箱根より』（隨筆、「讀賣新聞」二十二日）

▼五月 スペイン風邪が発生。八月には日本にも上陸し、翌年までに死者は十五万人にのぼった。島村抱月がスペイン風邪で死去。大正十年七月までの間に三回の流行が繰り返された。十一月十一日 第一次世界大戦が終結

一九一〇(大正八)年……………三十三歳

七月十七日の『讀賣新聞』で、近く新居樽氏と共に大阪へ赴くことが伝えられ、七月二十四日には『浴中遊樂中』と報告されている。

一月『私の好きな芝居の女』海の夫人エリキダ』(隨筆、「大觀」)

二月『ある夜』(小説、「文藝俱樂部」) 三月★『白隠と了徹』(小説、「新時代」) 四月『最後のをどり』(小説、「我等」)

『嫁取胡蝶』(アンデルセン作、童話、「おとぎの世界」) 五月『舊廬に居りて』(隨筆、「秀才文壇」)、『余の文章が始めて活字となりた時、二、その当時の感想』(アンケート、「文章俱樂部」) 六月『眠り人形アンナ』(童話、「おとぎの世界」)、『表徴の世界』(An apologue) (隨筆、「讀賣新聞」一日) 七月☆

『ほうれん草』(隨筆、「新曲」)、『豌豆の花』(アンデルセン作、童話、「おとぎの世界」)、『ヨツトの中で』(小説、「新公論」) 八月『赤い舞踏靴』(アンデルセン作、童話、「話の世界」) 十月

『(投書家としての私の経験) 女名前て投書する——『萬朝報』の新詩体、「讀賣新聞」の子守唄——』(隨筆、「文章俱樂部」)

一九二〇(大正九)年……………三十四歳

一月十八日 流行性感冒のため死去。

二月★『春の寢音』(小説、「大觀」)

一九二一(大正一〇)年

二月 楠山正雄編『孔雀夫人』(富士印刷出版)が出版される。

六月 木川惠次朗編『三人の女に』(小田原書房)が出版される。

一九二三(大正十二)年

十一月 楠山正雄訳『ダマスクスへ(附)夢の戯曲・白鳥姫』(ストリンドベルク戯曲全集Ⅲ、新潮社)に、中谷の未発表の原稿「白鳥姫」が楠山によって補筆されて収録された。

現在確認できる中谷の作品は二五一にのぼる。孔雀年譜には一〇七作品しか書かれていないため、新たに四〇以上の作品が発見されたことになる。作品のジャンルで最も多いのが小説で四十五作品あった。次に多いのは隨筆で三十八作。そして評論二〇作、戯曲十一作と続く。翻訳ものは全部で十一作品あり、その内訳は戯曲三、隨筆三、童話三、評論一、小説一となっている。

第二節 遺稿集から見る中谷徳太郎

紅野敏郎氏の「本・人・出版社 中谷徳太郎遺稿集——『孔雀夫人』——」(『国文学解釈と鑑賞』二〇〇一・六)と、「本・人・出版社 中谷徳太郎——『三人の女に』——」(『国文学解釈と鑑賞』二〇〇一・七)は、中谷の遺稿集『孔雀夫人』と『三人の女に』を中心に据えて、収められた作品を取り上げつつ、中谷の特色などを紹介している。『孔雀夫人』の序は坪内逍遙が書き、巻末には上司小剣・高須梅溪・坪内土行・池田大伍・楠山正雄が『追憶の記』を書いている。それぞれの追憶文は、生前の中谷の交流関係や作品解釈に示唆を与えるものである。以下、順に紹介していく。

上司小剣(一八七四—一九四二)は一八八六年に大阪から上京し、読売新聞社に入社する。一九二〇年に退社するまで二十四年間在社

していた。中谷が「讀賣新聞」に執筆が多いのも、彼の影響があつたのかもしれない。彼の追憶文は「我が中谷徳太郎君はどうしても亡くなつたとは思はれない」とその死を悼んでいる。小劍は「中谷君の藝術の愛好者で」あり、中谷はまた小劍の「小説の忠実な読者で」あつた。中谷は小劍の書齋を訪ねることもあり、親交の深かつた友人の一人であつた。

高須梅溪（一八八〇〜一九四八）もまた、「此の世を去つて了つたやうに思はれない。」と書いている。中谷とはよくお酒を飲み交わした仲のようだ。『根岸の一夜』（新日本）一九一八・二〇、を中谷の文学的方面がよく出ていると評し、「新しい江戸ッ児で近代思潮の一面にタツチした才人でなくては書けない」作品ばかりであつたと概観する。「これから伸びようとして、倒れて了まつた」とは、当時多くの人々が思つたことなのだ。

坪内士行（一八七〇〜一九八六）は中谷の師である逍遙の養子で、早大英文科で共に学んだ仲である。士行は「一ツ年下でありながら、「僕如きでさへ同君を弟扱ひにしてゐた」と、中谷が仲間から可愛がられていた様子を伝える。『黄昏のころ』（早稲田文学）、一九一六・一）では、新帰朝者の井上として描かれる。当時の「理想的過ぎる」世間に中谷の文学が受け入れられず、理解されなかつたことを悔んでいる。

池田大伍（一八八五〜一九四二）は、早大英文科を一九〇七年に卒業しており、同窓には秋田雨雀、中村星湖、白柳秀湖、島村民蔵がいた。後に、早大の一年先輩に当たる楠山正雄と親交を結ぶ。池田は中谷作品の欠点を鋭く指摘している。酒の飲み過ぎが、作品の表現が二の次になつていた原因であり、「世評なども大方その通りで

あつた」と言う。しかし、今顧みてみれば、「もつと誉むべきであつた」とも言う。中谷は興味を持った作品の影響をすぐに受け、自分の作品へ表すが、その扱つた「深刻な題材」や「深奥な思想」に徹底を欠いているところが惜しいところであつたようだ。

楠山正雄（一八八四〜一九五〇）は、早大英文科に学び島村抱月から強い影響を受けた。同級生に相馬御風、秋田雨雀、会津八一、片上伸らがいた。中谷より二歳年上で、一九〇六年に卒業している。『追憶の記』では、逍遙が言つたように「時の利を得なかつた」人だつたと言っている。生前発表されなかつた『春風』を含め、「文章も思想も割合に円熟した晩年の製作から」作品を選び、『孔雀夫人』を編んだことが書かれている。

紅野氏は、中谷の「シバキ」での活躍を示唆し、「小品の類」の方が「一瞬のもとに情調を伴なつた文で、伝えていく」中谷の特色が生かされているとも述べている。

もう一冊の遺稿集『三人の女に』を紹介した紅野氏の「本・人・出版社 中谷徳太郎——三人の女に——」では、岡野知十との關係を主に、俳諧にも興味を持つていた中谷を紹介している。岡野知十（一八六〇〜一九三三）は、江戸趣味に浸つた俳人である。中谷が大正七、八年にかけて執筆した「新曲」という雑誌を出したのも知十である。「新曲」に掲載された四作の中、小唄『七草粥』（大正七・二）以外の三作品、小唄『リズム模様』（大正七・六）、随筆『榜落葉』（大正七・十一）、随筆『はうれん草』（大正八・七）は、すべて『三人の女に』に収められている。また同じく『三人の女に』に収められた、短歌『プラタンの風』（大正五・八）、小説『三人の女に』（大正六・一）、小説『アンチセシス』（大正六・四）、音響詩『水郷

夜曲』(大正六・六)、訳詩『薄暮情調』(大正六・七)、詩『拳固がしやべる』(大正六・八)、六作品はいずれも「もんじやき」という雑誌に書かれたものである。「もんじやき」という雑誌についての詳細は不明だが、岡野馨が主宰する雑誌であった。「新日本」に発表された『根岸の一夜』(大正七・二)を除けば、「新曲」と「もんじやき」に発表された作品で遺稿集『三人の女に』は満たされている。

編者の木川惠二郎(一八九八〜一九二四)は岡野知十の次男である。中谷は彼のことを「恵ちゃん」と呼び、兄の岡野馨(一八九三〜一九四一)や知十と共によく談笑していたようだ。

宮川曼魚(一八八六〜一九五七)は巻末に『掌の黒子』という文を寄せ、中谷との出会い、「ハッピー会」のこと、知十と中谷との交流のきっかけなどを書いている。中谷には仲田勝之助(一八八六〜一九四五)という同窓の友人がいて、勝之助と曼魚が知り合いだったことから交流が始まったようだ。「ハッピー会」とは、文壇の一部の人々が気まぐれで催した、印絆天を着て集まってお酒を飲み交わす会合で、メンバーには、吉井勇、長田秀雄・幹彦兄弟、岡村柿江、久保田万太郎、鈴木三重吉、木下李太郎、泉鏡花、六代目菊五郎、市川男女蔵、馬生らの名を挙げている。紅野氏は、「ハッピー会」について次のように述べる。

「パンの会」のように華やかではなかったが、また文学史的に大きな意義はなかったろうが、ともかく中谷とその周辺、岡野知十とその周辺は、大正文壇のなかで、ある一角を形成していたことは確かだ。

最後に岡野知十の文として引用をしているが、これは知十ではなく木川惠二郎の『巻末に』という文である。

第三節 長谷川時雨と中谷徳太郎

第三節では、長谷川時雨と中谷徳太郎の関係と、影響などについて、尾形明子氏の「長谷川時雨 人と作品」(尾形明子「長谷川時雨作品集」、藤原書店、二〇〇九・十一)を基にして考察していく。尾形氏は、「シバキ」を発刊していた頃が「時雨にとつてもっとも華やかな時代だった」としている。時雨の華やかな時期、演劇活動に奔走していた時代に、「かたわらにはいつも中谷徳太郎がいた」というのは、時雨にとつても中谷にとつても重要な時代だったと言える。中谷もまた、時雨と過ごした時期が最も演劇活動に燃えたことは、一九一〇〜一九一三年の間に評論と戯曲が集中して執筆されたことから明らかである。

後にも先にも、現在判明している限りでは中谷の戯曲が舞台上で演じられたのは『夜明前』のみである。「狂言座」の公演が帝国劇場という「大劇場」で行われたことが、中谷の主張する「小劇場論」と矛盾することだと気がつく。持論とは異なった舞台での公演が、全く納得のいくものだったとは言い難い。

「狂言座」が中谷の「小劇場論」を実行できる場ではなかったこと、主宰者二人の事情で継続されなかったこと、さらには時雨と中谷の仲が以前とは異なってきた状況があった。中谷が演劇活動を続けていくには困難な状況が重なったのであった。

第二章 「シバキ」における中谷徳太郎

第一節 「シバキ」発表作品とその特徴

演劇雑誌「シバキ」は第一年と第二年に分かれる。第一年は一九二二（明治四十五）年に中谷の友人、楠山正雄を編集発行人として創刊した。中谷、楠山、長谷川時雨、秋田雨雀、島村民蔵、坪内士行、河野ゆづる（譲・桐谷）、本間久雄ら早稲田系の人々が中心となって執筆していた。「当時の新劇運動の勃興に刺戟され、新しき演劇創造を目的として三」創刊された。

同時代評を見ると、創刊された月には白鳥氏が『「シバキ」』といふ雑誌が新たにあらはれたが、俳優に氏を付けた外に別に特色もなく今の所『歌舞伎』の敵でない」（『讀賣新聞』、一九二二・一・八）と酷評している。しかし、その後は「シバキ」自体を批判するような記事はほとんど見られず、特に島田青峰氏は「シバキ」に惚れこんでいたと思わせるような評を書いている。「ホトトギス」（一九二二・四・一）では、白鳥氏が比較した「歌舞伎」に優ると褒めている。

その他「シバキ」の特色を評したものとしては、本間久雄氏が「早稲田文学」（一九二二・六・一）で、「殊に『近代劇の舞台』や欧州の劇作者の肖像、俳優の扮装などの写真版は、外の雑誌では見られぬ、趣味がある」と述べている。このように、「シバキ」は他雑誌と異なった、斬新な趣向の演劇雑誌であったことがわかる。

第一年は七月で休刊し、一九二三年二月から、楠山に代わって中

谷が編集発行人として「シバキ」を復刊する。執筆者は第一年とはほぼ同じである。しかし、第二年も七月号で「年四回の発行に改める」としたまま廃刊してしまう。

中谷が「シバキ」に書いた作品は小品・紹介も含めて、十六作確認できる。随所で誤解が見られるので付言しておく、エドワード・ゴオン・クレエグの『未来の劇場美術家のために』（一九二二年五月、六月）は、中谷の訳ではなく河野譲訳である。

『第一の對話』は、対話形式のため評論として区別するのは難しいかもしれないが、評論としての要素が大きいと考える。その内容は、少数の知識人に限った観客のための小劇場を主張する劇作家と、民衆啓蒙と経営の面から大衆に開かれた演劇を主張する劇評家の對話になつてゐる。最終的に、限られた観衆の小劇場を主張した劇作家は沈黙してしまうのだが、この劇作家と劇評家の論戦は、そのままた中谷の葛藤を表していると考えることができる。それまでも中谷は一貫して小劇場の必要性を説いてきた。ところが、中谷の主張は時期が早すぎたのである。秋田雨雀を中心とした小劇場運動が最も活発になるのは一九二三年であった。次節では中谷の主張した小劇場について詳しく考察していく。

第二節 小劇場論

中谷が「小劇場」の必要性を主張した作には以下のものがある。

- ・『小さな劇場』（『讀賣新聞』、一九二二・四・二十四）
- ・『スコットランドのレバアトリー劇場』（「シバキ」、一九二二・七）
- ・『笑はざる人より』（『讀賣新聞』、一九二二・一〇・一〜二）

・『第一の對話』（「シバキ」、一九一三・二）

・『劇壇の新運動（ウイスコンシン大学の演劇事業）』（「時事新報」、一九一三・四・九〜一〇）

大笹吉雄氏は「アメリカの小劇場が雑誌で紹介されたのは次の記事がもつとも早いもの一つだったに違いない」と、中谷の『小さき劇場』が一九一二年五月号の「演芸画報」に掲載された記事を紹介している。大笹氏が引用している「演芸画報」の中谷の記事は、「讀賣新聞」に載った『小さき劇場』のほんの一部分である。アメリカにおける小劇場運動が盛んになり始めたのは一九一一年から一二年にかけてだということだから、中谷の『小さき劇場』の記事は非常に速報性があつたと言える。

『小さき劇場』で中谷は、近代劇に対して「無知の群衆」の無理解な笑いによつて劇の幻想を破られたことに憤っている。そのため、小劇場において（この場合、帝劇に対して小規模の劇場という意）いわゆるIntelligent lawのための近代劇を観たいと、主張している。『スコットランドのレパアトリー劇場』では、一九一一年間のスコットランド、グラスゴオ市のレパアトリー・シアターの紹介をしている。このレパアトリー・シアターは「戯曲の事柄に対して、一般の芝居見物人の中の一定した部分の状態を表白したもので、このような見物人が地方の狭い場所に集うと、「思想の交換」がされやすく理想を実現するまでの過程が短い——これを「地方主義」と言う。戯曲の事柄に対して、一般の芝居見物人の中の一定した部分の状態を表白したもの」とは、次のような観衆を指すのだから。

戯曲に興味を持つてゐる民衆、彼等の要求を知り、レパアトリーイ式が循環式の設備よりも優つてゐると信じてゐる民衆——即ち『核心的観衆』

この「核心的観衆」が中谷のようないわゆるIntelligent lawなのではないか。さらに重要なのは、スコットランドのレパアトリー・シアターが「市民の劇場」であるということだ。

中谷のこの記事が、当時受け入れられ、演劇界に影響を与えたと言ひ難い。大笹氏によれば「演劇の民衆化」から「国立劇場設立」の問題が起ころのは、ずっと後の一九一九年ころからである。一九二二年は小劇場運動が最も盛んになり、「新潮」と「演芸画報」が同時に小劇場特集を組むほどであった。この頃に「ぼんやりと見えてきた一つのこと」は、わが国の小劇場運動およびその提唱者の一部の考えに、アメリカでの小劇場運動が影響を与えはじめていたということ」だとのことなのである。

一九二二年においても雨雀の小劇場主張が少数派だったことからわかる通り、雨雀よりさらに一〇年以上も早かつた中谷の主張は世間に通用しなかつた。

一九五一年に飯塚友一朗が、二者の考え方の違いをまとめた。アメリカの小劇場運動が「演劇を商業主義から解放するために企てられた劇場組織の合理化運動の全部」であり、ヨーロッパの小劇場運動が「演劇実験室であることを主眼とした少数の限られた観衆を相手にしていた」とする。

小劇場運動が盛んになつた一九一〜二二年のアメリカの小劇場の特徴は、スターに依らないアマチュアもしくはアマチュアリズムに拠つたエキスパートで構成されたメンバー、日替わりで上演するレパアトリー制、会員組織による選ばれた少数の観客を対象とすること、自宅や大学内の教室など場所を選ばず小さい劇場に依ること、

地域とのつながりが強いことがある。

『小さき劇場』、『笑はざる人より』、『第一の對話』でこれほどまで先進的な「小劇場論」を展開したにも関わらず、劇壇に影響が見られなかった理由とは何であるか。一つに「静かに演劇の幻想に浸りたい」という私的感情が論の先に立ってしまっただことがあるだろう。そしてもう一つ、「アメリカの小劇場」と「ヨーロッパの小劇場」の区別が明確になされず、両者を混同して紹介していたことがある。一九一一年になってようやく両者の違いが明確にされるようになったから、欧米の小劇場運動の渦中にあるのは両者の区別は困難であったかもしれない。だが、その区別よりもむしろ、Intelligent Jew のための小劇場がいわゆる「無知の群衆」の啓蒙につながり、グラスゴオのような「市民の劇場」創立への道だという部分が明確に伝わらなかったことが大きな原因であろう。

第三節 演劇に対する姿勢の変化

初めて発表した戯曲は「早稲田文学」（一九一〇・七）の『太陽跪拜者』で、同時に初めて「早稲田文学」に寄せた作でもあった。彼の戯曲の特徴として会話の軽快さ、巧妙さがあげられる。これは後の戯曲にも通じる。

一九一一年から「讀賣新聞」に記事を書き始め、一九一二年はほとんど「シバキ」を発表媒体としている。一九一二年七月の「シバキ」では『近代劇の舞台』の記事を書く。『小さき劇場』（『讀賣新聞』一九一二年・四・二十四）の補完とも取れる記事で、ジョン・ガルスワシイ作『鳩』は、ニューヨークのエエムス氏の小劇場開幕式で演

じられたことも触れている。また、それぞれに一枚ずつ舞台の写真が付されている。本間久雄は「殊に『近代劇の舞台』や欧州劇作者の肖像、俳優の扮装などの写真版は、外の雑誌では見られぬ、趣味がある」（『早稲田文学』、一九一二年・六）と評している。

一九一二年には三作の戯曲を書いている。「シバキ」に『蜜柑の皮』そして冒頭でも触れた『北の林』を「スバル」に書いた。『北の林』について中谷は翌月の「シバキ」にて次のようにコメントしている。

我ながらてこずったね。書きなぐつて投げだした作だ。最後の「世の中にはべらぼうな因縁もあったものだ。」といふ一句で Neo-Romanticism に対して Sarcasm の一矢を酬いたつもりだが、いっそのこと「世の中にはべらぼうな脚本もあったものだ。」としておけば自作の Sarcasm になつて面白かつたつけ。

続いて五月に『墮地獄』を「シバキ」に発表する。この後『櫻畑』（『シバキ』一九一三年・三・七）を翻訳して発表するまで、しばらく戯曲を書かず、評論や劇評を多く書いている。その間に『劇評家の脚本』（『シバキ』、一九一二年・六）という興味深い小説を翻訳している。内容は、劇評家が脚本を書いて上演することがことごとく失敗に終わり、劇評家の地位さえも無くすというものである。最後に中谷が次のことを書いているが、これまで書いてきた戯曲の不発が、関係しているようだ。

日本の現在の劇壇を風刺したやうなところがあつて面白い。そののみならず私自身のことまで書かれてあるやうな気のするところもある。

一九一二年の終わりぐらゐから、「演芸画報」、「歌舞伎」といった演劇雑誌にぼつぼつと記事を書く機会ができてくる。一九一三年は

「シバキ」第二次が発刊されるとともに、発表雑誌も前年の二倍に増え、中谷が発言する場が徐々に増えてきた。

「小劇場論」の行き止まりが『第一の対話』（シバキ）、一九一三・二）で明らかに「少なくとも素直に結末を読めば」なり、次の『劇場の新運動（ウイスコンシン大学の演劇事業）』（時事新報）、一九一三・四・九（一〇）以降、小劇場に関する作は見られなくなる。

この記事では、アメリカのウイスコンシン大学の一九一〇―一三年前後の演劇事業を紹介する。「新しい劇はアメリカの劇であるべき」と主張したヂッキンソン教授の論を引用し、日本とアメリカの劇場を比較している。中谷は、現在においてアメリカと日本の劇場は似たような状態にあるが、商業化が徹底しているのは日本の劇場だと批評する。けれどアメリカや日本から「他の国々の作家と比肩して遜色のない劇作者が生まれるのは、今からいく年の後であろうか」と批判する。

一九一三年七月で「シバキ」は廃刊する。正確には年四回の発行に改めたまま発刊されなかつたのである。五月号の後書き「緑のかげに」は、中谷筆だと推測される文章である。その中で雑誌発刊の雑務に追われてウンザリしていること、もつと身体を動かして実践的な仕事をしたくないことなどを書いている。「もしもシバキがなくなれば、次の項目に従って新たな運動を起こすだろう」と、目標を掲げらる。

- 一、演劇講演旅行
- 二、新劇団の創立及興業
- 三、新時代の舞踊及音曲の創始
- 四、舞台監督術研究

五、男女俳優の理想的養成

六、該演劇専用的小劇場の建設

いずれも中谷が理想とし、評論、翻訳随筆等を通して必要性を訴えてきたことである。一九一四年四月十二日「讀賣新聞」に載つた『印象と記憶』という随筆では、重要な手がかりがあつた。

最近に我が美術劇場稽古場内の光景が頭に憑きをり候、新稽古場は神楽坂岩戸町なりと聞きて、

この「美術劇場」は、芸術座を脱退した秋田雨雀と沢田正次郎らが一九一三年四月に立ちあげた劇場で、「シバキ」同人の楠山正雄、河野桐谷（諷）や、三上於菟吉の同級である宇野浩二、鍋井克之らも参加していた。第一回試演は、一九一四年四月に有楽座で行われた。ハウプトマン作・楠山正雄訳『平和際』、兩雀作『埋れた春』、田中介二作『博多少女郎浪枕』を上演した。中谷は「シバキ」の仲間と新たな運動を起していたのである。それも有楽座といった「小さい劇場」で試演を行つていたことから、中谷の「小劇場論」を実現する場でもあつた。しかし、美術劇場は失敗続きで二回の試演で終わつてしまふ。中谷の「小劇場論」の破綻が現実になつてしまつたのだつた。

一九一六年一月の『黄昏のころ』では、五幕物の歌劇を執筆しようとして書いている。また、同月に『ジャヤマン・ピイフ』を「演劇」に発表している。その後しばらく戯曲は書かれなくなる。

一九一八年四月に、『夜明前』が「秀才文壇」に掲載される。四年前に「狂言座」で上演されたものと同じ表題である。未見のため改作されたのかどうかも確認できなかった。他に未発表の戯曲が孔雀年譜を見る限り六作ある。そのうち「春風」は「孔雀夫人」に収め

られ、『白鳥姫』は後に楠山の著作に収められることになる。

このように生涯を通して演劇に興味を持ち続けた。一九一四年から翌年にかけては、時雨と中谷が離別する時期に当たる。中谷も時雨も出会った頃はお互いの存在が、演劇や文筆に向かわせる原動力であった。「女を煽て、軍を起し、女に煽てられて剣をとる奴はおおたわけだ。」と自身を叱咤していた中谷は、「シバキ」の同人たちと身体を動かす実践の仕事に取り組んでいた。

中谷の演劇活動は、評論に多くの意義を見出せるが、時代を先取りし過ぎていた部分があり、一方で劇作者としては成長過程にあった。中谷が紹介した「小劇場論」、「新舞踊」論は先見的な視野を持つていたと評することができる。「シバキ」の仲間には中谷の考え方を理解していた人々がいた。後に「小劇場論」を先頭に立って訴える秋田雨雀が、中谷の論とよく似たことを主張しているのも偶然ではないだろう。中谷の先見的な考え方が、彼らの主張の前段階にあったことは、今後さらに評価されていくべきである。

おわりに

現在、我々がある作家の評価を知りたい時に、同時代評は欠かすことのできない資料である。当時の第三者の評はもちろん重要である。しかし、それだけでは不十分である。中谷の場合小説なり戯曲なり、創作に批評の重きが置かれていて結実しないで終わったとしか映らない。だが、実は評論を多く書いており、後の演劇運動を先取りしていたという事実もわかってくるのである。過去の評価がそのまま現在にも適用されるのは、その作家の一部分しか照らしていな

いことがある。時が経った今、照らされてこなかった部分を掘り起こす時期である。

中谷の演劇活動は、評論に多くの意義を見い出せるが、時代を先取りし過ぎていた部分があり、劇作者としては成長過程にあった。また、時雨との共同作業的な部分が多分にあり、私生活が文筆活動に多大な影響を及ぼす性格であった。その性格は、感受性が豊かで同情心溢れる人柄のなすもので、短所でもあり長所でもあった。様々な芸術的刺激を吸収して自己の作品に昇華しようとする姿勢は、まさにこの性格が生かされている。

中谷の演劇活動を研究していく上で、「シバキ」同人たちの演劇活動とも重要な関係があることがわかる。特に秋田雨雀は小劇場論において中谷と共通した主張を持っていた点でも、美術劇場で共に活動していた点からも、彼とのかかわりは今後さらに追及する必要がある。

志半ばにして夭折した中谷徳太郎の人生や著作を「時の利を得なかつた」過去のものとしてしまうのはあまりに惜しい。現在読んでも登場人物たちの会話や描写は古臭さを感じさせず、生き生きとしている。彼の随筆は負けず嫌いな、少しひねくれた言い回しが絶妙な味わいを出しているものが多い。俳諧や小唄などは追求することができなかつたが、「もんじやき」、「新曲」同人たちとの関係を探ることは、大正文壇の新たな一面を見ることになりそうだ。

今後、中谷徳太郎を主役としてさらに研究が進むことを期待する。本研究がその第一歩となれば幸いである。

中谷徳太郎 著作一覧

※網かけは孔雀年譜掲載を示す。

収録順

通番	タイトル	分類	掲載誌	巻号	年	元号	月	日	～月日	メモ	同時代 評の数
1	豹と鷹	小説	世界文藝	1巻2号	1910	M43	5			1910年2月脱稿	
2	太陽跪拜者	戯曲	早稲田文学	56号	1910	M43	7				1
3	嘘	戯曲	劇と詩	1号	1910	M43	10				
4	正雄さん	小唄	劇と詩	2号	1910	M43	11			徳太郎の署名、表題作の他に「門邊」永代稿「宵月」の3作あり	
5	ドシツアンの失敗	翻訳戯曲	劇と詩	3号	1910	M43	12			モウリス・ベアリング作	
6	新道	小唄	劇と詩	3号	1910	M43	12			徳太郎の署名、表題作の他に「さざんくわ」「なで志こ」の2作あり	
7	新時代劇のシヨオ (Shavian Phylosophy)	随筆	劇と詩	3号	1910	M43	12			橋本泰祿、N生の署名	
8	うらみごと	小唄	劇と詩	6号	1911	M44	3			臼井権八の署名、単行本『孔雀夫人』所載	
9	落ちる椿の花 浅草の活動写真にあるやうな帝国劇場の日本人むき人情劇	評論	讀賣新聞		1911	M44	4	18		朝刊	
10	歌舞伎座の新味 懷中鏡で悪戯する菊五郎	評論	讀賣新聞		1911	M44	4	19		朝刊	
11	俗謡樂の新情味	不明	新彩		1911	M44	7			雑誌なし	
12	東京夜景	随筆	新日本	1巻5号	1911	M44	8			M. Toq. の署名	
13	十年の後(一)	戯曲	早稲田文学	73号	1911	M44	12				
14	蜜柑の皮	戯曲	シバキ	1巻1号	1912	M45	1			1911年11月脱稿	
15	北の林	戯曲	スバル	4年1号	1912	M45	1				4
16	劇場印象記(一) 歌舞伎座	随筆	シバキ	1巻2号	1912	M45	2				
17	新しい舞謡	評論	シバキ	1巻3号	1912	M45	3				
18	小さき劇場	評論	讀賣新聞		1912	M45	4	24		朝刊、文芸欄	
19	墜地獄	戯曲	シバキ	1巻4・5号	1912	M45	5			1912年4月脱稿	2
20	Magda	翻訳評論	シバキ	1巻4・5号	1912	M45	5			Huneker作	
21	「タンタイルの死」と「道成寺」	評論	シバキ	1巻6号	1912	M45	6				
22	「蚊獅」	評論	シバキ	1巻6号	1912	M45	6				
23	劇評家の脚本	翻訳小説	シバキ	1巻6号	1912	M45	6			The odor Herz作「余の脚本を書かざる理由」と題してドイツの新聞に掲載したもの。	
24	舞臺上の新味(二)『キスマット』	紹介	シバキ	1巻6号	1912	M45	6			T・N生の署名、エドワード・ノオブロウチ作	
25	スコットランドのレバアトリー劇場	評論	シバキ	1巻7号	1912	M45	7			6月20日脱稿、「シバキ」第一年は7月号で休刊	
26	近代劇の舞台(四)(五)(六)	紹介	シバキ	1巻7号	1912	M45	7			(四)ジョン・ガルスウィッチ作「鳩」、(五)エドモンド・ロスタン作「夢の王女」、(六)ルドルフ・レジエル作「レディ・マボリシア」※[ナカタニ]の署名	
27	笑はざる人より	評論	讀賣新聞		1912	T1	10	1	～10・2	朝刊、文芸欄	
28	「二十世紀」を見る	評論	演藝叢報	6巻12号	1912	T1	12			11月19日脱稿	
29	「ザロメ」を見てから	評論	歌舞伎	150号	1912	T1	12			11月13日脱稿	

30	テリイの公演旅行—女優エレン テリイがアメリカを巡回講演当時随行せる者の記録—	翻訳随筆	時事新報	10513~10514, 10516~10518, 10520号	1912	T1	12	14	~15, 17 ~19, 21 日	全6回	
31	(大正元年の追憶)「浮名集」と「柿石衛門」	評論	歌舞伎	151号	1913	T2	1				
32	十人の隣り子	評論	大正演藝	1巻2号	1913	T2	2				
33	第一の對話	評論	シバキ	1巻1号	1913	T2	2			第二次	1
34	櫻痴	翻訳戯曲	シバキ	1巻2~5号	1913	T2	3		~4, 5, 7 月	チェーホフ作	5
35	橋の名残	戯曲	早稲田文学	89号	1913	T2	4			1913年3月脱稿	4
36	劇壇の新運動くウイスコンシン大学の演劇事業>	評論	時事新報	10629~10630号	1913	T2	4	9	~10		
37	脚本翻訳	評論	讀賣新聞		1913	T2	4	10	~11	朝刊	
38	サヴォイ座の沙翁劇	紹介	シバキ	1巻4号	1913	T2	5			N生の署名、挿画の解説	
39	虎都の印象	随筆	讀賣新聞		1913	T2	5	13	~14	朝刊	
40	(何処へ行く?)ばたりとぶつ倒れに行く	随筆	新潮	18巻5号	1913	T2	5			アンケート	
41	野呂間人形を見る	評論	演藝畫報	7巻6号	1913	T2	6				
42	駆落	戯曲	讀賣新聞		1913	T2	7	13		朝刊、日曜附録	
43	山童印象記	随筆	婦人評論	2巻15号	1913	T2	8	1			
44	雨降る日	小唄	享樂	1号	1913	T2	9			「享樂」創刊号	
45	モンテネグロの旅	翻訳随筆	新日本	3巻9号	1913	T2	9			ピエル・ロチ作	
46	女優の愚出	翻訳随筆	婦人評論	2巻20号	1913	T2	10	15		エレン・テリイ作	
47	広報	戯曲	讀賣新聞		1913	T2	10	5		朝刊、日曜附録	
48	(「字みだれ」)	評論	演藝畫報	7巻12号	1913	T2	12			11月10日脱稿	
49	大正二年、藝術界の收穫	随筆	時事新報	10887号	1913	T2	12	23		アンケート	
50	上着(ダレゴリイ)	不明	秀才文壇	14巻1号	1914	T3	1				
51	環りゆく國	戯曲	早稲田文学	98号	1914	T3	1			単行本『孔雀夫人』所載、四幕恋愛劇、1913年11月脱稿	
52	(明治の東京)思ひますまゝに	随筆	新小説		1914	T3	4			3月9日脱稿	
53	印象と記憶	随筆	讀賣新聞		1914	T3	4	12		朝刊、岩野泡鳴との連署	
54	(狂言座愚語)『夜明前』のでまかせ	随筆	歌舞伎	166号	1914	T3	4			相野屋徳太郎の筆名、3月10日脱稿	
55	夏	小説	秀才文壇	14巻7号	1914	T3	7				
56	(曾遊の涼味)山も川も森も	随筆	讀賣新聞		1914	T3	7	4		朝刊、読売文壇、石川欽一郎との連署	
57	世界的戦争と汎日本主義	評論	讀賣新聞		1914	T3	8	20	~21日	朝刊、読売文壇	
58	抜け蓑	小説	早稲田文学	106号	1914	T3	9			1914年7月脱稿	2
59	現下の演劇壇 その将来は如何	随筆	讀賣新聞		1914	T3	9	26		朝刊	
60	氷蠟日記	随筆	新評論	1巻1~2号	1914	T3	11		~12月	(一)10月13日脱稿、(二)11月9日脱稿	
61	火薬の匂ひ	随筆	讀賣新聞		1914	T3	12	5	8日	朝刊、読売文壇	
62	ねかひ	小説	新評論	2巻1号	1915	T4	1				2
63	發達	小説	秀才文壇	15巻1号	1915	T4	1				

64	駅長	小説	讀賣新聞		1915	T4	1	10		朝刊、日曜附録	
65	かけら	小説	早稲田文学	112号	1915	T4	3				3
66	独身会の追憶	隨筆	讀賣新聞		1915	T4	4	25		朝刊、日曜附録	
67	孔雀夫人	小説	文章世界	10巻6号	1915	T4	6			単行本『孔雀夫人』所載	2
68	水脚日記	隨筆	讀賣新聞		1915	T4	6	13		朝刊、単行本『孔雀夫人』所載	
69	真昼	小説	太陽	21巻10号	1915	T4	8			単行本『孔雀夫人』所載	3
70	(東京の夏の情調) 暑寐の夢に	隨筆	文章世界	10巻9号	1915	T4	8			7月8日脱稿	
71	霧立つ山にて	隨筆	讀賣新聞		1915	T4	9	5	12, 19日	朝刊、日曜附録	
72	不良少女と藝術	評論	處女	11巻12号	1915	T4	12				
73	黄昏のこゝろ	小説	早稲田文学	122号	1916	T5	1				3
74	謀叛人	小説	秀才文壇	16巻1号	1916	T5	1				
75	ジャアマン・ピイフ	翻訳戯曲	演劇	2巻1号	1916	T5	1			モーツパサン作『マドモツセル・ファイフ』の焼き直し、対話	
76	燃えきるまで	小説	讀賣新聞		1916	T5	1	30		朝刊、日曜附録	
77	眼	小説	新日本	6巻2号	1916	T5	2				1
78	なげふし	小説	邦楽	2巻4号	1916	T5	4			単行本『孔雀夫人』所載	
79	謀叛人(續篇)	小説	秀才文壇	16巻4号	1916	T5	4				
80	春のたはむれ	対話	處女	12年4号	1916	T5	4				
81	雁名残	隨筆	讀賣新聞		1916	T5	4	2		朝刊、日曜附録	
82	水のほとり	隨筆	讀賣新聞		1916	T5	6	11		朝刊、日曜附録	
83	樽の岡へ	小説	文章世界	11巻8号	1916	T5	8				2
84	一人一景	隨筆	文章世界	11巻8号	1916	T5	8			アンケート	
85	ブラタンの風	短歌	もんじやき		1916	T5	8			単行本『三人の女に』所載	
86	男化粧	小説	早稲田文学	132号	1916	T5	11			単行本『孔雀夫人』所載	3
87	(余が好める秋の描写 諸家より得たる回答) 投簡三つ	紹介	文章倶楽部	1巻6号	1916	T5	11			アンケート	
88	坐敷宇	隨筆	讀賣新聞		1916	T5	12	24		朝刊、日曜附録、12月9日脱稿	
89	三人の女に	懸想文	もんじやき		1917	T6	1			単行本『三人の女に』所載	
90	打つ勿れ	小説	太陽	23巻3号	1917	T6	3			春季大附録の一つ、石山太柏の挿画三点がある	4
91	物語の時代	小説	早稲田文学	137号	1917	T6	4			単行本『孔雀夫人』所載	4
92	アンチセンス	小説	もんじやき		1917	T6	4			単行本『三人の女に』所載	
93	梨花の雨	隨筆	讀賣新聞		1917	T6	4	22		朝刊、日曜附録	
94	浮世繪	小説	東方時論	2巻5号	1917	T6	5				
95	(鏡花氏の新作『幻の繪馬』合評) 神秘めいた色	評論	中央文学	1年2号	1917	T6	5				
96	文字鹿の子	小説	書堂		1917	T6	5			単行本『孔雀夫人』所載	
97	水に堰かれて	詩	趣味之友	18号	1917	T6	6				
98	水郷夜曲	音響詩	もんじやき		1917	T6	6			単行本『三人の女に』所載	
99	過ぎ行く幻影	小説	文章世界	12巻7号	1917	T6	7				1

100	泣垂髪	小説	斯論	1巻3号	1917	T6	7		
101	薄暮精讀	訳詩	もんじやき		1917	T6	7		イェーツ、ラフソンの詩、単行本『三人の女に』所載
102	私の愛唱する夏の歌	紹介	文章倶楽部	2巻7号	1917	T6	7		白蓮、式子内親王、躬恒の歌
103	邪癪する雲	小説	東方時論	2巻8号	1917	T6	8		
104	拳固がしゃべる	詩	もんじやき		1917	T6	8		単行本『三人の女に』所載
105	夢香の昇天	小説	斯論	1巻5号	1917	T6	9		
106	夜の秋	小品	青年文壇	2巻9号	1917	T6	9		
107	未來派の服飾	紹介	趣味之友	21号	1917	T6	9		
108	福妻	小説	讀賣新聞		1917	T6	9	25	~27, 29日、10月9日~13, 16日 朝刊、全10回
109	袴が長襦袢か	随筆	趣味之友	22号	1917	T6	10		
110	趣味の學校	随筆	斯論	1巻6号	1917	T6	10		
111	雨がふる	小説	新日本	7巻11号	1917	T6	11		
112	長き夜	小説	斯論	1巻7号	1917	T6	11		
113	水窓雑記	随筆	讀賣新聞		1917	T6	11	28	30日 朝刊
114	産に住む蟲	小説	新時代	2巻1号	1918	T7	1		
115	主婦の腰掛	小説	斯論	2巻1号	1918	T7	1		
116	殴られる女	小説	趣味之友	25号	1918	T7	1		
117	福岸の一夜	随筆	新日本	8巻2号	1918	T7	2		単行本『三人の女に』所載
118	熊が威めた	小説	中央文学	2年2号	1918	T7	2		
119	春を待ちつつ	随筆	秀才文壇	18巻2号	1918	T7	2		1月8日脱稿
120	七草菊	小唄	新曲		1918	T7	2		単行本『孔雀夫人』所載
121	野狐の屍	小説	讀賣新聞		1918	T7	3	17	朝刊、日曜附録
122	若き日の夢	小説	新時代	2巻4号	1918	T7	4		単行本『孔雀夫人』所載
123	夜明前	戯曲	秀才文壇	18巻4号	1918	T7	4		大正3年に狂言座によって上演された作品だと思われる。
124	霧森の花	小説	新公論	33巻5号	1918	T7	5		
125	おぢさんの幻影	小説	斯論	2巻5号	1918	T7	5		
126	花から雨に	随筆	讀賣新聞		1918	T7	5	26	朝刊、日曜附録。単行本『孔雀夫人』所載
127	リズム模様	小唄	新曲		1918	T7	6		単行本『三人の女に』所載
128	簾を伏せて	随筆	趣味之友	29号	1918	T7	6		
129	蕉熱地獄へ	小説	太陽	24巻9号	1918	T7	7		
130	(夏の旅行地の感想)松本平と日本アルプス	随筆	新論	29巻2号	1918	T7	8		アンケート
131	月夜	小説	中外	2巻8号	1918	T7	8		
132	甘酒つくる宿	小説	雄辯	9巻9号	1918	T7	9		
133	(思ひ出の月)町中の月	随筆	大觀	1巻5号	1918	T7	9		
134	栴蓿菜	随筆	新曲		1918	T7	11		単行本『三人の女に』所載

135	一つの挿話	小説	秀才文壇	18巻12号	1918	T7	12		
136	初冬の箱根より	随筆	讀賣新聞		1918	T7	12	22	朝刊、日曜附録
137	(私の好きな芝居の女)海の夫人エリキダ	随筆	大観	2巻1号	1919	T8	1		
138	ある夜	小説	文藝俱樂部	25巻2号	1919	T8	2		
139	白塚と了徹	小説	新時代	3巻3号	1919	T8	3		単行本『孔雀夫人』所載
140	最後の夜どり	小説	我等	1巻3号	1919	T8	4		
141	蝶取胡蝶	童話	おとぎの世界	1年1号	1919	T8	4		H.C.Andersen作
142	養廬に居て	随筆	秀才文壇	19巻5号	1919	T8	5		入手不可
143	一、余の文章が始めて活字となりた時、 二、その当時の感想	随筆	文章俱樂部	4巻5号	1919	T8	5		アンケート
144	表徴の世界へ—An apologue—	小説	讀賣新聞		1919	T8	6	1	朝刊、日曜付録
145	ねむり人形アンナ	童話	おとぎの世界	1年3号	1919	T8	6		
146	はうれん巻	随筆	新曲		1919	T8	7		単行本『三人の女に』所載
147	豌豆の花	童話	おとぎの世界	1年4号	1919	T8	7		H.C.Andersen作
148	ヨットの中で	小説	新公論	34巻7号	1919	T8	7		
149	赤い舞踏靴 (投書家としての私の経験)女名前で投書す	童話	話の世界	1巻3号	1919	T8	8		H.C.Andersen作
150	る—『萬朝報』の新詩体、『読売新聞』の子守唄—	随筆	文章俱樂部	4巻10号	1919	T8	10		
151	(評論と創作)春の聲音	小説	大観	3巻2号	1920	T9	2		単行本『孔雀夫人』所載

60

未発表作品

1	矛盾の矛盾	
2	底なき穴	
3	芽生	
4	少年の春	
5	春風	単行本『孔雀夫人』所載
6	白鳥姫	ストリンドベルク
7	獣が歩く	小説長編

掲載誌と作品数

掲載誌	計	1910	1911	1912	1913	1914	1915	1916	1917	1918	1919	1920
讀賣新聞	28	0	2	2	4	5	4	4	3	3	1	0
シバキ	14	0	0	11	3	0	0	0	0	0	0	0
早稲田文学	9	1	1	0	1	2	1	2	1	0	0	0
秀才文壇	9	0	0	0	0	2	1	2	0	3	1	0
もんじやき	6	0	0	0	0	0	0	1	5	0	0	0
斯論	6	0	0	0	0	0	0	0	4	2	0	0
劇と詩	6	5	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
文章世界	5	0	0	0	0	0	2	2	1	0	0	0
新日本	5	0	1	0	1	0	0	1	1	1	0	0
趣味之友	5	0	0	0	0	0	0	0	3	2	0	0
文章倶楽部	4	0	0	0	0	0	0	1	1	0	2	0
新曲	4	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1	0
太陽	3	0	0	0	0	0	1	0	1	1	0	0
大観	3	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1
新時代	3	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	0
時事新報	3	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0
歌舞伎	3	0	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0
おとぎの世界	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0
演藝畫報	3	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0
婦人評論	2	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0
處女	2	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0
東方時論	2	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0
中央文学	2	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0
新評論	2	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0
新潮	2	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0
新公論	2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0
世界文藝	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
我等	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
雄辯	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
文藝倶楽部	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
話の世界	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
中外	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
大正演藝	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
青年文壇	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
スバル	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
新小説	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
新彩	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
邦樂	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
享樂	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
畫堂	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
演劇	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
計	151	7	6	17	19	12	11	16	25	23	14	1

発表誌の数→

3 5 6 12 7 7 10 13 14 9 1

作品ジャンル数

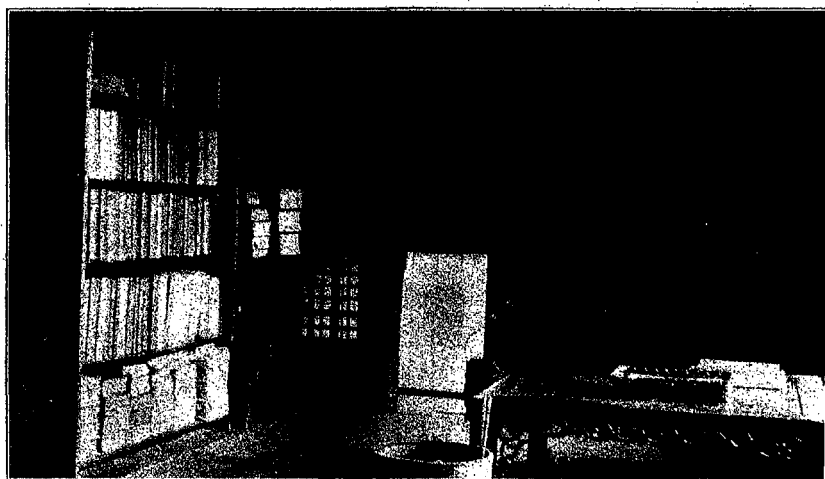
分類	計	1910	1911	1912	1913	1914	1915	1916	1917	1918	1919	1920
小説	45	1	0	0	0	2	6	7	11	12	5	1
随筆	39	1	1	1	4	7	4	4	4	8	5	0
評論	20	0	2	8	7	1	1	0	1	0	0	0
戯曲	11	2	1	3	3	1	0	0	0	1	0	0
小唄	8	2	1	0	1	0	0	1	1	2	0	0
紹介	6	0	0	2	1	0	0	1	2	0	0	0
翻訳戯曲	3	1	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0
翻訳随筆	3	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0
童話	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0
詩	2	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0
翻訳評論	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
翻訳小説	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
対話	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
短歌	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
懸想文	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
音響詩	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
訳詩	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
小品	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
童謡	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
不明	2	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0
計	151	7	6	17	19	12	11	16	25	23	14	1



『長谷川時雨作品集』より



単行本『孔雀夫人』より



『水郷の家』

単行本『孔雀夫人』より 中谷徳太郎の書斎

参考文献・資料一覧

- 楠山正雄編『孔雀夫人』（富士印刷出版、一九二一・二・十三）
 木川恵次朗編『三人の女に』（小田原書房、一九二一・六・一）
 紅野敏郎「本・人・出版社 中谷徳太郎遺稿集」『孔雀夫人』
 （『国文学解釈と鑑賞』二〇〇一・六）
 紅野敏郎「本・人・出版社 中谷徳太郎——『三人の女に』」（『国文学解釈と鑑賞』二〇〇一・七）
 陶山務「ある不遇作家の禪味（中谷徳太郎）——わが忘れえぬ人——」（『大法輪』一九五一・十一）
 長谷川仁・紅野敏郎編『長谷川時雨 人と生涯』（ドメス出版、一九八二・三・十五）
 尾形明子「長谷川時雨 人と作品」（尾形明子『長谷川時雨作品集』、藤原書店、二〇〇九・十一）
 日本近代文学館 小田切進『日本近代文学大事典 机上版』（講談社、一九八四・一〇）
 日本近代文学館 小田切進『日本近代文学大事典 第二巻』（講談社、一九七七・十一・十八）
 日本近代文学館 小田切進『日本近代文学大事典 第四巻』（講談社、一九七七・十一・十八）
 日本近代文学館 小田切進『日本近代文学大事典 第五巻』（講談社、一九七七・十一・十八）
 大笹吉雄『日本現代演劇史 明治・大正篇』（白水社、一九八五・三）
 大笹吉雄『日本現代演劇史 大正・昭和初期篇』（白水社、一九八六・六）

- 『岩波西洋人名辞典 増補版』（岩波書店、一九五六・一〇）
 田中栄三『明治大正新劇史資料』（演劇出版社、一九六四・十二）
 『大正ニューズ事典 第三巻』（毎日コミュニケーションズ、一九八七・九）
 国文学編纂部『知つ得 明治・大正・昭和 風俗文化誌』（學燈社、二〇〇七・八）

- 一 尾形明子「長谷川時雨 人と作品」（尾形明子『長谷川時雨作品集』、藤原書店、二〇〇九・十一）
 二 脚注一に同じ。
 三 徳太郎の署名。表題作の『正義さん』の他、『門邊』『永代橋』『宵月』の三作がある。
 四 徳太郎の署名。表題作の他に『ささんくわ』などで志この二作あり。
 五 編集余録、N生の署名
 六 白井権八の署名
 七 M.Togの署名
 八 九十四ページに徳太郎作「北の林」について、本人と思われるコメントあり。著者は「木場町生」とある。
 九 トク・ナカタニの署名
 一〇 Theodor Herzl 作『余の脚本を書かざる理由』と題してドイツの新聞に掲げたもの。
 一一 T・N生の署名
 一二（四）ジョン・ガルスワシイ作『鳩』（五）エドモンド・ロスタン作『夢の王女』（六）ルドルフ・レジエル作『レディ・パトリシア』※（ナカタニ）の署名
 一三 一九一三年五月に『玉ははき』『空華』を歌舞伎座で上演。
 一四 岡田八千代談（長谷川時雨 人と作品）（尾形明子『長谷川時雨作品集』、藤原書店、二〇〇九・十一）以下、（尾形

一五 七月号のみ『櫻畑』となっている。他『さくら畑』と表記。

一六 N生の署名

一七 狂言座：舞踊研究会の後に生まれた劇団。六代目尾上菊五郎と時雨が創始。顧問に森鷗外、夏目漱石、佐佐木信綱が名を連ねている。日本の古典および新作の研究上演を目標としたが二回の公演で立ち消えとなった。

一八 「中谷徳太郎氏は先月末より病氣にかゝり目下臥床中なり」と『讀賣新聞』一九一四年九月八日、朝刊)

一九 長谷川仁・紅野敏郎編『長谷川時雨 人と生涯』(ドメス出版、一九八二・三・十五)では、時雨と三上の交際が始まる時期を四年の春ごろとしているが、『日本近代文学大事典』では五年ごろとしている。また尾形明子氏の『長谷川時雨 年譜』に於いても二人が実際に会うのは一九〇五年秋とある。

二〇 「読売新聞」(一九一五年八月六日、朝刊)に「中谷徳太郎氏は富士山に登り目下箱根に滞在在中」と記載あり。

二一 『孔雀夫人』の夫人は時雨をモデルにした作品であると言われている。中村星湖の評では「シユニツラアの『遺書』の主人公の男を女に変えたやうなものである」とある。※「これまで『早稲田文学』では認められていたが、この作品から中央文壇に登場する。」(尾形)
二二 当時の時雨の様子がうかがえる。主人公は一九一五年夏から秋にかけての時雨と中谷。(本文では一九一六年となっているが、矛盾が生じるため、一九一五年とした)(尾形)

二三 紅楓の評によると、時雨と中谷をモデルにした作品らしい。茂という女が他に男をもち、田川という男は捨てられ、女の妹を誘惑するという話のようだ。

二四 箱根塔之沢での時雨の様子を知ることのできる唯一の作品。一九一一年初春の情景。(尾形)

二五 (尾形)

二六 陶山務「ある不遇作家の禅味〔中谷徳太郎〕——わが忘れえぬ人——」(『大法輪』一九五二・一一)

二七 脚注二十七に同じ。生方敏郎『人のアラと世間のアラ』の出版記念会。神田駅二階のミカド食堂で開かれた。本文では「大正七年暮れ」とあるが、生方の著作の出版が大正六年であるため訂正した。

二八 日露戦争後の賠償をめぐる政府の交渉に不満を募らせた国民が暴徒と化した東京を舞台に、行き場のない愛に苦しむ人妻と青年の絶望が書き込まれている。(尾形)

二九 高須梅溪『孔雀夫人』追憶の記(大正九年十二月十九日)より

三〇 Web「神奈川近代文学館年表 大正元年〜十五年」。出典は「初冬の箱根より」

三一 『日本近代文学大事典 第五卷』(日本近代文学館、小田切進編、一九七七・十一・十八)

三二 大笹吉雄『日本現代演劇史 大正・昭和初期篇』(白水社、一九八六・六)